

WAT (ワット)

2002年2月1日発行

Contents

02 中国・豊満ダムについて

泉 留維

05 <レッツチタリポート>

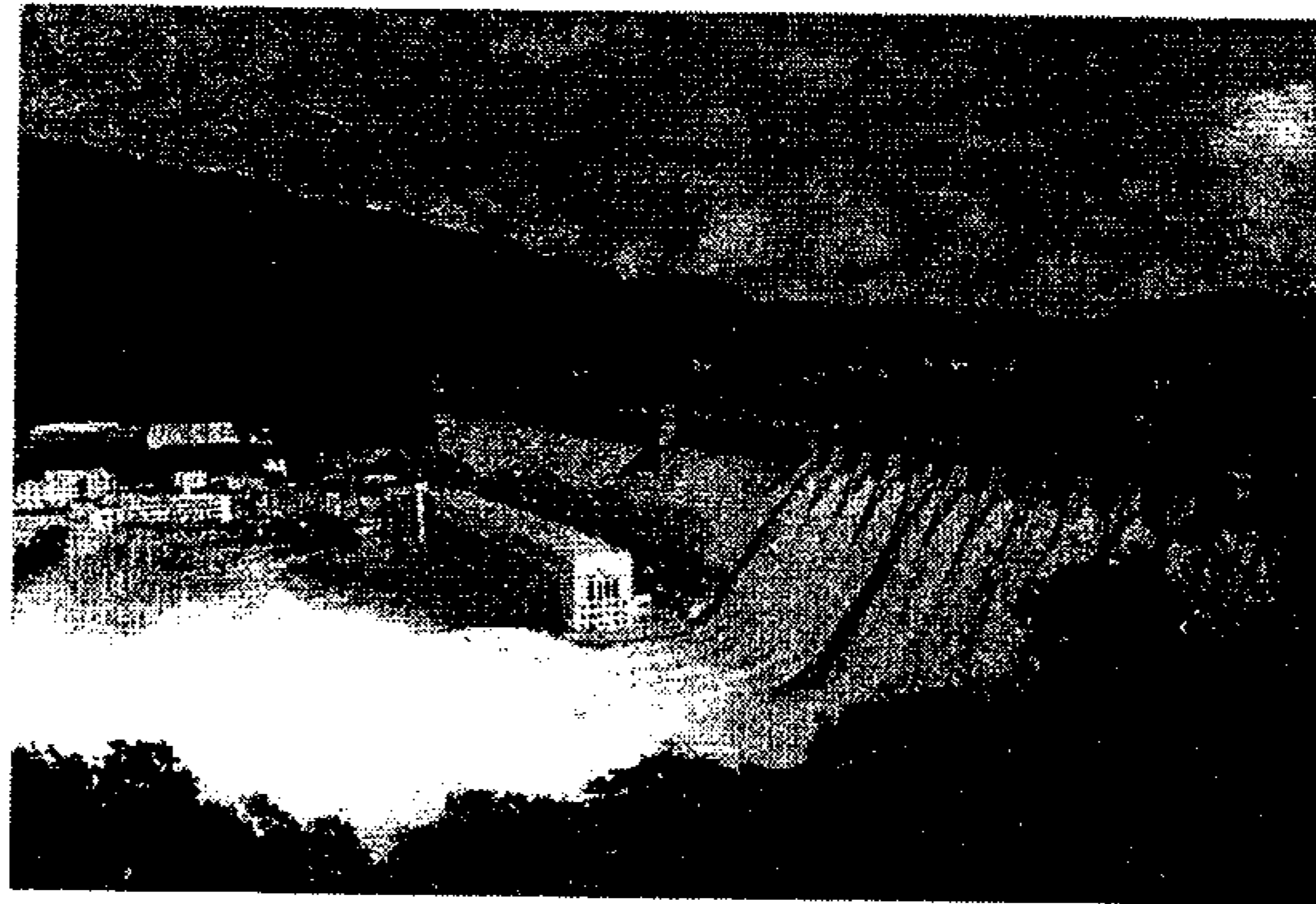
まちへの想いは、時を超えて (2)

杉浦明巳

中国・豊満ダムについて

泉 留維 (いずみ・るい)

この1月上旬から中旬にかけて、中国東北部を巡ってきた。その中で、吉林市郊外の松花江にある豊満ダムを見学する機会に恵まれた。中国でダムといえば、多くの人が、長江中流域にできる三峡ダム（総出力1820万kW）を思い浮かべるであろうが、この豊満ダムも様々な意味で三峡ダムに匹敵するほどの話題性を秘めているのである。



第一に、その歴史である。このダムと付随する発電所は、1937年に満州国によって建設が始められている。当時においては、東アジア最大規模であり、6年後の1942年にダムの貯水が始められた。1942年11月8日の大阪毎日新聞に、この豊満ダムについての記事が載っている。その記事について、少し見てみよう。

大東亜戦争下、満洲が悠々世界に誇る科学の凱歌—三千年の歴史を秘めて滔々と流れる大松花江を堰止めて世界有数の大発電所を形成する豊満ダムは起工以来満五年、一億八千万円の巨費と一千二百万人の延労力を費して今ようやく完成を見んとしている。

<中略>

この月末から結氷期になるが来春解氷とともにこの大堰堤に堰止められた水は刻々と増水し五百五十平方キロ、琵琶湖の八割の面積を持つ人造湖水では世界最大の貯水池が出現する。このダムを狭む上流下流の水位差によって明春四月ごろより〇〇万キロワットの大発電が開始されるが、このダム工事の完成は

満支の河川の流量の季節的変化の甚だしいこと、勾配が緩やかであることなどから水力電気には不適格とされていた定評を完全に覆し鴨緑江の水豊発電所とあわせて世界有数の水力電気国として満洲が大東亜戦争下に高らかに凱歌をあげるわけである。しかもなお豊満ダムの完成はその電力による満洲国産業開発の原動力を確保するのみならず<中略>この豊満ダムの完成は明年秋の予定で満洲国産業開発上大なる進歩をもたらすものである。

このように、当時においても、非常に話題性のある大規模公共事業であった。ただし、この大事業の裏では、多くの労働者が亡くなっていることを私たちは忘れてはいけない。戦前の日本国内においては、豊満発電所（約40万kW）ほどの規模の出力を持つ水力発電所はなく、宇治発電所（2万5千kW）や猪苗代第一発電所（3万5千kW）のような小規模ものがほとんどであった。満洲国において、このような大規模発電所をつくる本当の意図はいったい何だったのであろうか。

満洲国崩壊後、中国政府が接收し、89%まで完成していた工事を続行した。そして、1960年、第一期工事が終了し、約55万kWの発電所が完全に起動し始めた。実は、この時期、豊満発電所副所長、その後技師長（1955～66年）を勤めていたのが、現在、全国人民代表大会常務委員会の委員長である李鵬である。豊満発電所は、当時の中国で最新鋭の水力発電所であり、周恩来の養子である李鵬が勤めるほど重要な施設であった。1988年からは、満洲国時代の設計にはなかった発電機の設置プロジェクトが始まり、1992年には約72万kW、98年には約125万kWにまで拡大している。松花江には、4つの大規模な水力発電所があり、その中で豊満発電所は、一番歴史の長い発電所である。また、現在、2,000人もの人々が働いていて、発電開始以来、約80億kWhも発電しており、中国東北部の産業発展に大きく貢献している。

第二に取り上げるべきことは、豊満ダムによって生じる美しい自然の「いたずら」であろう。すなわち、豊満ダムの完成によって、中国四大自然奇観（桂林の山水、雲南の石林、長江三峡）と呼ばれるすばらしい樹氷を、ダムの下流の松花江沿いに誕生させることになったのである。「冬の中の春」のような美しさから、江沢民は、「寒江雪柳、玉樹瓊花、吉林樹氷、名不虚伝」（寒い松花江のほとりの雪柳には美しい花が咲いている。吉林の樹氷はその名に違わず美しい）と記したそうである。

このような樹氷が生じるのは、次のような理由からである。吉林市内から25kmの松花江上流の豊満ダムから流れてきた水は、水力ポンプを通じて温度が上がっており、同時に発電所のダムの落差が大きく、水流も速いので、ダム下流75km以内の松花江の水は冬でも凍らない。気温が氷点下25度に達すると、松

花江では水蒸気がゆっくりと立ち上がり、松花江沿いの長い土手の松や柳に、一定の気圧、温度、風向などの条件下で、水面に立ち上る霧が樹上で結晶して霧氷になる。これが、吉林名物の樹氷ができる仕組みでなのである。ちなみに、今回の訪問では、残念ながら、この樹氷を見ることはできなかった。

他にもいろいろあるが、あと1つだけ挙げるとすれば、この豊満ダムは、前の五角紙幣（0.5元）の裏を飾っていることであろうか。日本円でたとえば、10円玉に刻まれている宇治の平等院のようなレベルであろう。とにかく法定貨幣にも登場するほど有名なダムであるのだ。現在の中国の紙幣（新紙幣）を見てみると、表は毛沢東、裏は国内の旧所名跡（万里の長城や桂林の山水など）になっている。もしかしたら、三峡ダムも近々お目見えするかもしれない。

豊満ダムを訪れたのは、ほんの1時間強であったが、非常に話題性に満ちたダムであり、わたしにとって興味深い訪問になった。最後に本題とはずれるが、吉林市について少しふれたい。吉林市は工業都市であり、非常に電気需要が旺盛な都市である。現在のところ、豊満発電所に代表されるような水力発電と石炭による火力発電が主であるが、石炭の硫黄分による大気汚染（自家発電や暖房用も含んで）は深刻であり、最近ではトウモロコシから燃料アルコールをつくり、それで発電するプロジェクトが進行している（これについてはまた別の機会に紹介する）。吉林市は、松花江水銀汚染という過去に大きな事件があり、現在でも大気汚染は深刻で、公害問題が噴出している都市である。日本にとっても、松花江は日本海に流れ込む黒龍江の主要な支流であり、また偏西風で大気は日本に流れてき、吉林市の出来事はとても人ごとではないのである。

レッツチタリポート

まちへの想いは、時を超えて（2）

杉浦 明巳

—私の生まれ育ったまち—

（前回からの続き）

ロータリークラブの仕事は、今年の秋にある3日間の大きな大会イベントのための臨時事務で、1年だけの期限付きだ。地元の事業者がすべてロータリーの会員というわけではないが、世間知らずの私が少しでも事業者の顔を覚えるのは、今後のレッツチタにとって決してマイナスにはならないだろう。信頼関係ができ、理解が得られたら個別に相談もできるかもしれない。組織の規模こそ違え、任意団体の事務のイロハも覚えられるし、何より事務所のある商工会議所は地の利がいいのだ。つまり、半六邸や実家と同じ商店街のなかにある。時には、お昼ご飯を食べに同級生の中華そば屋の暖簾をくぐったり、母娘で切り盛りしているお向かいのお肉屋さんにお惣菜を買いに行ったり・・・外をふらふらしていようものなら立ち話が始まって途端に地面に根が生えてしまう。私が家を出てから、新しい人も入っているし、知らない人ももちろん多いのだけど、原則として旧市街地で高齢化が進み、子ども世帯は郊外に散らばっているような住宅事情だ。家の祖父母、父や母、子供時代の私を知る人たちに、またぞろ取り囲まれるのは、何ともホッとするような、くすぐったいような・・・

どこのウマの骨なのか素性はしっかりばれているのだけれど、嫁に出てしまって利害やしがらみのない身と言うのは実は結構な強みだ。（失うものは何にも

ないもの!) その点、同じ出戻り組でも、かたや達ちゃんは祭りだ、同年だと、たとえそこに住んでいなくても、生まれ育った地元のしがらみをもろにかぶっている。半田には昔ながらのこうした互助のシステムがしっかり残っていて、それが今時の家族事情と相容れずに、いたるところで無理が生じている。半田の奥さんたちの間では、春の祭りの季節が近づくと「祭り未亡人」が数多く出現する。夫たちが連日深夜まで祭りに駆り出されて未亡人状態になるからである。もちろん私もその一人だ。祭りのための経済的な負担だけでなく、3世代が同じ地区に住んでいないことで、親から子への祭りや文化の伝承がスムーズにいかなくなっている。妻や子供にしてみれば、自分の住んでいる地区の外でのお父さんの活躍や貢献は実感しにくく、ただでさえ遅い時間に疲れて会社から帰ってくるのに、それからまた、祭りに出かける夫の行動はとうてい理解されない。過労で倒れていつ本物の未亡人になってもおかしくないような状況なのだ。家族の批判を浴び、そのうえ体だけでなくお金も差し出さねばならないので負担も大きく、どこの組も先行きの不安を抱えている。そういう逆境の中で、今年は5年に一度、半田市内の山車が31台一堂に集結する半田山車祭りも開催される。祭りボランティアで夫たちが地域通貨を稼いで、それが半田の商店街で使えれば、少しは奥さんたちの機嫌も直るかもしれない。地域の伝統文化の継承、これも大きな課題の一つだ。

—まちの星券・途中経過—

半六邸で配った「まちの星券」は、全部で30分券532枚だった。「まちの星券」は4枚で一綴りなので、大体一人あたり一綴り1~2枚を渡したとして、単純計算して延べ100人弱の人の手に渡ったことになる。もっとも、ボランティ

アはリピーターが多いので、その分を考えると50人ぐらいだろうか？

半年間の整備作業の中で、まちの星券が出たのが最後の1ヶ月。茶会に向けてみんなが内心焦りながら、一つにまとまり始めた時期。悠長に地域通貨の説明をしている暇もなく、帰る人を捕まえては個別に、何でこれが生まれたのか、どうやって使うのか、どういういい点があるのかななどをざっと説明し、相手はわけがわからないうちに「まちの星券」を握らされ、気がつく「ありがとう」と握手させられているといった具合。我にかえった男性陣の大方は、「こんなのもらっても俺使わないから困るなー」「それなら奥さんや子どもにあげてよ、この紙に使い方書いてあるから。」それに比べると女性の方は手応えがいい。遊び感覚でおもしろそーと反応したり、お店で使えることに興味を持ったり・・・

日本では、毎日の買い物や地域、子どもなどはまだまだ、母親に属するものなのだろう。つまりは地域通貨のユーザーとして主婦が大きな鍵を握っているということだ。実際、茶会後の3ヶ月間で協力店に出回った「まちの星券」は20数枚で使ったのは全て女性。お店のほうも、大将は会合やら何やらで出ていることも多く、留守を預かり店番をしているのは奥さんやおばあちゃんといったことも多い。商店街で町おこしをねらって地域通貨を運用するなら、女性の意向は見逃せない、という実感を強く持った。

今回の「まちの星券」の発行は、最初から土壇場になっての急場しのぎの要素が強かった。それを承知で、準備も整わないうちから見切り発車させた。茶会が終わると、みんなどっと疲れが出て、しばらく作業は停滞することはわかりきっていたので、なるべくたくさん券を発行したかったが、当然思うようにはいかなかった。半六邸に関しては、まだまだ見通しの立たない課題がたくさんある。整備作業の主体である半六倶楽部の意思決定機関が確立していない。半六邸のご当主の意向が、成功裡におわったお茶会後もはっきりしない。実は、

半六邸内にあるおトイレはすべて使用不可能で、茶会の折は屋敷を出て隣の「酒の文化館」まで足を運ばねばならなかった。トイレの修繕は、これから作業を継続させ、イベントなどを行う上でも必須条項であり、かなりまとまった資金がいる。当然、今回の茶会の上がりぐらいではカバーできるものではなく、イベントを積み重ねて自己資金をためる覚悟でいるのか遅かれ早かれいずれ決断しなくてはならないだろう。この手の活動を継続していくとなると、あまりにも不確定な要素が多すぎて、尻すぼみに終わりがちなものもうなずける。あるボランティアネットのスタッフが教えてくれたことばが頭をよぎる。「こういう活動は、最初から最後まで全部奉仕で終わらせるのではなくて、半分は遊びにしないと続かないよ。」ウーン、達ちゃん、半六倶楽部はどうなるのだろうねえ？茶会以来、動きのなかった半六倶楽部の ML に久しぶりにお知らせが入った。2月末に中日写真協会が撮影会を行いたいのだそう。久しぶりにお掃除をしにみんなが集まる。

レッツチタを取り巻く様々なネットワーク

地域通貨には、いろんな草の根的な活動をしている NPO や市民団体が関心を寄せている。彼らは明確な目的や問題意識を持って現場をこなしている場合が多いので、社会の流れに敏感だし、地域通貨の説明をしても理解がはやい。地域通貨を使って目指す社会と NPO 等の目的とは同じ延長線上にある。レッツチタも立ち上がり当初から福祉系の NPO や環境系の市民団体などと連携を取ってきた。半六邸もそうだったけれど、どこの団体も自分たちの目的を持って、それに向かっていくだけで手一杯というのが現状だ。協力という形で入っても、本来の目的に割り込ませる形で地域通貨を説明することになる。つまり本来の

目的に地域通貨の導入が加わり、それが付け足しのようにになると非常にわかりにくくなってしまふような気がする。確かに地域通貨はツールだ。手段であつて目的にはならない。信頼され、一般に広く普及すれば誰もが使える便利なツールと言えるだろう。けれども、現状では地域通貨ということばも知らない人がまだまだ多い。地域通貨の可能性は頭の中で描けても、これを具体的にどう働かせたらいいのか模索中の段階なので、当面試行錯誤しながら使うことが目的のようになってしまふ仕方がない状況だ。ツールとして使いこなせるまでには経験がいるだろうし、どういう時にどのように使えば効果があるのか先例もいるだろう。自分個人の経験から言つても、頭で考えているうちはこわごわ腰が引けていたけど、実際に使つていくうちにだんだんと腑に落ちていったように思う。振り返ってみると、いかに自分がどっぷりと円のお金の価値観に漬かりこんでいるかがわかつておもしろい。地域通貨というもう一つの尺度が加わることで、それまで回りに流されるだけで、あまり考えもしなかつた自分の価値観について考えたり、見直したりすることができ、それが自分という人間を映し出す鏡のように作用する。

あれこれ能書きを垂れるよりも、実際地域通貨を体験してしまえば、そんなに難しいことではないのだが、必要性を感じない人にとっては、ただわずらわしいだけだろうし、今まで情とか善意の部分で処理されてきたものが、評価を受け、円と連動することに戸惑いや違和感を覚える人もいるにちがいない。つまり、目的を同じくしていてもそのための方法として誰もが地域通貨を手にとるとは限らない。要はニーズのあるところで地域通貨を媒介にいかにか人と人を結び付けていくかと言うことなのだろう。コーディネートして循環のためのインフラ部分を整備する。メニューリストを作成したり、通帳や紙券を発行する。信用が得られ、大きな循環の輪が回りだせば、各地の小さな地域通貨の団体は

内外の情報を出し入れすることがメインの仕事になるのだろうか？運営事務局の仕事は地域通貨が世の中に浸透するにつれ、ずいぶん変わっていくだろう。今はまだ、産声を上げたばかりで当分は攻め一色の展開になるのだろうけど、いつか守りに転じる時期がやってくるかも知れない。地域通貨の団体と言っても、円のお金と無縁ではられないわけで、特にこの攻めの時期は円のお金が肩代わりする部分が多い。経済的に自立しようと思ったら、何を収益事業にするのだろうか？会費だけでは頼りない。行政や企業の補助金・助成金？地域通貨が絡む内職的な別の事業を立ち上げて、運営スタッフが働く？人手が十分確保できればいいけれど、余裕がないと本末転倒になりそうだ。運営事務局が握っている唯一の特典は情報だからこれを管理・コーディネートすることで収益の見込みはできるかもしれないが、ネット上のオープンな情報は管理できない。ネットで流れる情報で、はたして地域通貨が目指している人と人の暖かいつながりを作れるのか疑問でもある。レッツチタの会計は今のところ、会費と講演活動などの謝礼でまかなっている。このままでいいなら、赤字にはならない。回りのNPOや団体が何百万や、何千万の予算を動かしているのに圧倒される。けれど、レッツチタの場合はまだ、お金を動かすと言うより「人おこし」の段階だ。信頼でき、熱意のある人やネットワークを見つけてつなげていく。最近やっとそんな気運が盛り上がってきたように思う。

今回の「まちの星券」は、まだ振り出しにすぎない。この夏には、半田の旧市街地に照準を絞って、地域通貨の仕掛け人講座を毎週土曜日に6回行うことになっている。日本福祉大学の学生向けの授業と一般向けの生涯学習の講座がドッキングしたかたちで、企画・進行をレッツチタが受け持つ。内容は、受講者がそれぞれ自分の目的にあったグループに分かれて地域通貨をデザインしてもらい、それに伴う現実的な問題点を洗い出し理解を深めると言う趣旨のワー

クショップになっている。公開講演会も設けて、受講者だけでなく外からものぞけるようにした。

知多半島はもともと福祉 NPO がとても元気なところだ。その中で、半田市の行政も最近ではこのような NPO の実績をだんだんと評価するようになってきたらしい。実力のある NPO が出てきたということだろう。NPO だけでなく、半六倶楽部にしてもその他の市民団体にしても、自分たちの活動だけにこだわらずに横の連携を取ろうという声をよく耳にするようになった。今、ようやく水面下でゆっくりとした動きが起ころうとしている。

ワット2月号 2002年2月1日発行 第2号

編集/ワット友の会・発行/ゲゼル研究会

221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野気付

tel 045-441-0407 fax 020-4665-6684

URL: www.watsystems.net e-mail: info@watsystems.net

無断転載複写を禁ず。

Copyright 2002 ワット友の会